

公開講座 「人はなぜこんなに残酷になれるのだろうか」 —排除と排斥を考える— (1)

森 達也・中村一成・山本かほり・松宮 朝



公開講座

「人はなぜこんなに残酷になれるのだろうか？」

—排除と排斥を考える—



森 達也 さん

森達也(映画監督・作家)

広島県呉市生まれ。オウム真理教信者たちを被写体にしたドキュメンタリー映画『A』(1998年)は、ベルリン国際映画祭など多数の海外映画祭に招待されて大きな話題となった。99年にはテレビ・ドキュメンタリー「放送禁止歌」を発表。2001年には映画『A2』が山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞・市民賞を受賞。映画作品は他に『311』、『Fake』、『i〜新聞記者ドキュメント』がある。2011年『A3』(集英社インターナショナル)が講談社ノンフィクション賞を受賞。他の著作に、「放送禁止歌」(智恵の森文庫)、「職業欄はエスパー」「いのちの食べかた」「死刑」「クオン・デ〜もう一人のラストエンペラー」(角川文庫)長編小説作品「チャンキ」(論創社)、「すべての戦争は自衛から始まる」(講談社文庫)、「U 相模原に現れた世界の憂鬱な断面」(講談社現代新書)などがある。近著は「千代田区一番一号のラピルス」(現代書館)。2023年には劇映画を公開予定。

コロナ禍で、「自粛警察」などの集団的な私的制裁が活発化し、「不寛容」が社会的な問題として認識されるようになっていく。相模原の障がい者施設での事件、ヘイトクライム、さらには日常的なヘイトスピーチ、差別、ネットでの書き込みなどの問題が顕在化し、「正義」が過剰になり、社会は「逸脱」を許さない。こうした問題にどのように向き合うべきか。2018年7月に「実行犯」とされる人たちの大量死刑執行により「終結」と思われている一連の「オウム事件」を扱ったドキュメンタリー『A』『A2』を通じてこの問題に対峙した森達也監督を講師に迎え、今の日本社会を考えたい。また、第II部ではジャーナリストの中村一成さんも交えて、対談を行う。

日時
2022年6月29日(水)
14:00 - 16:30

参加費無料

中村一成(ジャーナリスト)

1969年、大阪府寝屋川市生まれ。新聞記者を経て2011年からフリー。在日朝鮮人や移住者、難民を取り巻く問題や、死刑が主なテーマ。映画評の執筆も続けている。著書に『ルポ 京都朝鮮学校襲撃事件——<ヘイトクライム>に抗して』(岩波書店、2014年)『ルポ 思想としての朝鮮籍』(岩波書店、2017年)『映画でみる移民/難民/レイシズム』(影書房、2019年)『ウトロ ここで生き、ここで死ぬ』(三一書房、2022年)など



中村 一成 さん

場所 愛知県立大学長久手キャンパス S101 + オンライン

(会場定員：100名)

状況により、延期・中止・またはオンライン開催のみに変更することがありますので、最新状況は地域連携センターWebサイトにてご確認ください。

申し込み先：愛知県立大学地域連携センターWebサイトにアクセスいただき、「人はなぜこんなに残酷になれるのだろうか？」専用ページよりお申込みください。
Webサイト：<https://www.bur.aichi-pu.ac.jp/renkei/>



※事前に『A』をなるべく鑑賞しておいてください



コーディネーター：愛知県立大学 社会福祉学科 教員 山本かほり・松宮朝
主催：愛知県立大学 地域連携センター お問合せ：愛知県立大学 研究支援・地域連携課 (メール)renkei@bur.aichi-pu.ac.jp

本稿の趣旨（山本かほり）

もともと、この企画は学部の1年生のための「大学入門」的な講義（教育福祉基礎論）に「カルト対策」が組み込まれていることに対する違和感からはじまった。もう2-3年前のことだ。正直に言えば、私たちがあまり関与してこなかった本講義だが、この講義自体を見なおす議論の中で、「カルト対策」講座の存在を知ったのだ。

その背景には、過去に学部内で「カルト宗教」に入り、「深刻な状態」になった学生がいたからだと説明された。もちろん、私たちもこのような「問題」があることは知っていた。しかし、だからといって、大学の講義で「カルト対策」講座はそぐわないだろうと思った。そして、すぐに『A』『A2』を撮った森達也さんをお呼びしたいと思った。『A』『A2』の中で映し出された信者たちの姿、教団関連の施設周辺の近隣住民たちとの「不思議」な関係など、大手メディアには決して報道されることがない側面を見つめるべきではないかと思ったのである。

今年度（2022年度）、社会福祉学科では、私たち二人（山本・松宮）がこの講義の担当となったために、森達也さんに講演していただく企画を実現させようと動き始めた。私（山本）の友人の中村一成さんに森達也さんを紹介していただき、ご快諾をいただいた。さらに、この企画を充実させるために、講義の後に中村一成さんと対談していただくことにした。そして、大学の公開講座的な性格をもつ企画として、対面/オンラインで一般公開もした。

企画者としては、この企画は大成功だったと思っている（もちろん反省はあるが）。1年生の学生にとっては、きっと考えたこともない視角を提供されただろうし、一般受講者の方々にも満足していただけたと思う。当日の6月29日の午後、非常に刺激的で緊張感をはらんだ時間が過ぎていった。

しかしながら、あまりに「皮肉な偶然」としか言えない事件がおきた。7月8日の安倍晋三元総理の襲撃事件だ。「犯人」とされる男性が、事件の動機として「旧統一教会の信者となった母親が多額の献金をしたことによって自身の人生が狂ってしまったこと」をあげ、そして、旧統一教会と安倍晋三元総理をはじめとする政治家たちとの密接なつながりをあげたのだ。

この事件以降、旧統一教会報道が加熱したことは周知のことであろう。同時に多くの大学が、学内に「入り込んだ」旧統一教会等「カルト宗教」関係者に「気をつけるように」という注意喚起をしていることも報道された。ある国立大学はビデオまでつくり、どのように「カ

ルト宗教」関係者が接近してくるかを大学のWebにアップしていた。

私たちは、この状況にある意味で、再度「危機感」を感じた。「カルト」という言葉の前で、大学が思考停止してしまっているように感じたのだ。「気をつけるように」という注意喚起は、大学内の「治安対策」に近い機能をしはじめたようにも感じたのだ。

もちろん、「信者」となった人の中には、「後遺症」で深刻な状態にある人たちがいるのも私たちは知っている。しかしながら、「洗脳された被害者」という報道や理解は、一方で当事者の主体的な契機を無にして、単純に非主体的な存在としてみなしてしまっているのではないかということに違和感を抱かざるを得ない。

もやもやとした日々を過ごしていたが、その間に、6月29日の企画に参加した一般受講者の何名かの方から、この企画を文字化してほしいと言われた。作業の大変さを考えると、躊躇しなかったと言ったらウソになる。しかし、日々加熱する旧統一教会関係報道をみながら、1995年の「オウム報道」も頭をかすめた。そこで、私たちは、森達也さんの言葉と中村一成さんの言葉を文字化することを決心した。本稿では、まず、(1)として、森達也さんの講演部分と中村一成さんとの対話を掲載する。後半の討議は(2)として別に掲載する予定だ。

「物事は多面的だ」

おそらく、どの大学教員でも異口同音にこうした言葉を使って講義や演習をしているだろう。しかしながら、そういう大学教員自体が、非常に単純な正義を学生たちに語っていないだろうか？ 私たち自身への自戒をこめて、以下、当日の講演、対話を記録として残したい。なお、文字化にあたっては、愛知県立大学大学院人間発達研究科前期課程の石原苑子さんに大変お世話になった。はじめに記して感謝を申し上げる。

（山本かほり）

松宮朝（以下松）

本日司会を務めさせていただきます、愛知県立大学の松宮と申します。最初に、今日の開催にあたってどのような企画の趣旨であったのか、そしてどのようなことを議論してみたいかということ、簡単に私の方からご説明させていただきたいと思ひます。

今会場におられる方はなんとなく雰囲気が分かると思うんですけど、半分以上、90人くらいが1年生の学生です。ほぼ、教育と社会福祉を学ぶ学生になります。一般の方もたくさんご来場いただいておりますけれども、最初は授業の一貫で企画しておりました。大学に入って、社

会の様々な課題を学ぶ「教育福祉学基礎論」という授業の1つとして企画したものです。この授業の中に、「カルト対策」という内容が1コマ入っています。どの大学でもされていることかなとも思うんですけども、あまりにも単純に、カルトは怖いとか、悪い、近寄らないようにしましょうという、想像力の及ぶことなくですね、何かが悪い/正しいという結論だけを取り出して、その問題を分かったようなことになってしまうような懸念を持ちました。もう少しゆっくりと、大学生になったばかりの時はむしろ、しっかりとこういう問題や課題とかを考える、まあ善悪の基準を立てる前に、まずはちょっと考えてみる必要があるんじゃないかと。ということで、森達也さん、そして、後半対談で出ていただきますけれども、中村一成さんのお二人に是非お話を伺いたいということで企画をしたものです。

ちょうど今1年生の人が多いということを言いましたけれども、私が大学に入った年が1992年で、奇しくも森達也監督の『A』という映画の、今日もそのお話をされると思いますが、死刑を執行された麻原彰晃氏が、私が当時通っていた大学で講演をしたことを記憶しています。ある意味カルトとかいわれる前にもものすごく近くにいろいろな出来事が起きていたな、もう少し、いろいろな人たちと関わりを持っていたなというのを感じています。まず、考えていくときに実際いろんな立場とか、いろんな存在を知ってから、価値判断をする必要があるんじゃないか。今日はそういうきっかけになればと思ひまして、森達也さんの講演、そしてその後中村一成さんの対談を、是非皆さんと一緒に深めて参りたいなと思ひます。

最初に、森達也さんの方から『A』という映画を中心としたお話をいただき、その後、中村一成さんと質疑のような形でセッションをしていただきます。森達也さんのたくさんの著書を拝見しておりますと、こういう様々な会場での対談などの記録、そこで議論したことがものすごくたくさん書かれていて、今回も、せっかくこれだけの人が集まった機会ですので、実りのある議論ができればと考えております。是非みなさんの方から、会場からも、あるいはオンラインで参加の方からも、積極的なご参加をいただければと思います。

それでは、森達也さんの方からお話しをお願いいたします。

森達也（以下森）

こんにちは。人相があまり良くないし、あと作品が、どちらかというとちょっと頭のどこかが振じ切れている

んじゃないかな、って思われるような作品が多いので、ちょっとエキセントリックな人なんじゃないかってよく思われるんですね。で、時おりインタビューされるんですけど、インタビュー終わってから記者の方が吐息ついてから、「普通の方だったんですね。」って。「えっ、どういう意味ですか。」って聞くと、「いやなんか、気に食わない質問したら急にテーブルひっくり返すんじゃないかと緊張してました。」みたいに言われて、決してそういうタイプじゃないんですけど、なんかそう思われがちなんで、こういう時は一番最初に何かね、落語で言えば枕みたいな、そういう話をなるべくするように心がけているんですけど、今日何にも思いつけなくて、まあでも今の話が枕になったかな、っていう気もするので、話を始めます。

基本的には、授業でも観てくれているらしいので、僕の最初の映画ですね、『A』というオウム真理教のドキュメンタリー映画を観てくれているという前提で話をしますが、ただ、もう映画についてね、僕の方で補足することも何もないし、質問されれば答えますけど、でも、実はあのシーンはこれこれこんなことがありましてとかね、あんまり言いたくないし、言っても意味ないだろうなっていう気はしてるので、一応軸は、オウム真理教の犯罪と、もちろん僕の映画を軸にしながらも、40分くらい喋った後に、30分、中村一成さんに来てもらって、2人でちょっと対話するっていう風にしてもらいました。だから、頭40分、今から、ほとんど実は何も決めてないです。今、林家三平さん状態で、って言ってもわかんないよね、なんのことかね。年配の方は分かるかもしれない、林家三平さんってね、喋りながら考えてたんです。次何を言うのかっていうね。まさしく今そういう状態ですけど、まず、でもそうはいってもね、ベーシックなところは語らなければいけない。

1995年3月20日、オウム真理教が地下鉄サリン事件を起こしました。とにかくもう、日本中が大騒ぎになります。戦後最大級の事件と言って間違いないと思います。1972年には、正確には1971年から1972年にかけて連合赤軍の事件、浅間山荘と山岳ベースの事件がありました。3日間ほぼ生中継で、浅間山荘における警察と機動隊が過激派と対峙する銃撃戦をテレビは放送しました。瞬間的な視聴率は80%を超えたのかな。

ただしオウムは、その期間を考えると、物量的には連赤をはるかに超えています。1995年3月20日からほぼ1年間、テレビは、テレビだけじゃない、新聞も雑誌もオウム漬けでした。新聞はもう一面、ほぼ毎日オウムです。週刊誌も毎月オウム特集で、臨時創刊号っていうも

のもしょっちゅう出てましたね。テレビはもう、朝から夜中までオウム特番だらけ。スポーツ新聞の一面から野球とサッカー消えたんです。1995年の3月20日から半年くらい。報知もデイリーニュースも、東京中日スポーツも全部一面をオウムなんです。そういう時代でした。

当然まあそういう時代だからこそ、僕は当時、フリーランスでテレビのディレクターでしたけれど、仕事がオウム以外ないんです。色々やりたい企画あったんです。還暦を過ぎたプロレスラーとか、子どもが8人いる家族のドキュメンタリーとか。でもそういう企画書持っていても局のプロデューサーからは、「こんなんでもいいから、なんでもいいからオウム持ってこい」と即答されました。オウムだったらなんでもやるよ、つまり朝から夜中までオウム特番だらけなんだけど、肝心のソフトが全然ない訳ですよ。だからとにかく常に求めている状態で、だからそこでどんな取材なのか、どんな内容なのかってきちんとそれをね、精査する時間もないままにどんどん放送していくって、そういう状況でした。

そういう状況の中で、僕はドキュメンタリーと報道の両方をフィールドにしていたから、オウムの信者たちを被写体にしたドキュメンタリーを発想しました。でもそのころは、1995年の6月くらいですが、麻原含めて幹部信者たちはほぼすべて逮捕されていて、撮ろうにも撮れない状況です。撮れるのは一般信者。じゃあ、一般信者のドキュメンタリーを撮ろうと考えて、荒木広報副部長に手紙を書いて、あなた方を撮りたいとオファーしました。でも返事は来ない。それは想定していたので、もう一回送ったら返事が来ました。当時は東京港区青山にオウムの本部があったので、そこに行って荒木さんと話して、基本的にはそのとき、オウム信者たちの日常をドキュメンタリーで撮ることに了解をしてもらいました。

条件が1つだけ。施設内には出家している信者もいるけれど、出家してない、つまり一般の生活を送りながらオウムの施設に通っている在家信者もいます。オウムの信者であることがバレると会社にいれなくなる、あるいはご近所から白眼視される、だから出家はともかく在家信者の顔にはモザイクを入れてほしいと。

ある意味でもっともです。でも僕はモザイク入れたくない。嫌いなんです。映像を仕事にしているのに安易に使いたくないという感覚もあります。それともうひとつ、これは理屈になるけれど、特にオウムの事件以降、モザイクはネガティブな記号になってしまっていた。これが提示する意味は顔や名前などアイデンティティを隠さねばならない人。言い換えれば悪い奴。だからモザイ

クはできるだけ使いたくないと答えたら、荒木さんは「分かりました、じゃあ私がみんなを説得します。」と書いてくれました。それから半年後に荒木さんから、一応みんな納得してくれましたと連絡をもらい、ようやくテレビ・ドキュメンタリーとして撮影を始めました。この作品が後に『A』になります。

冒頭のシーンは業務用テレビカメラで撮っています。でもそれ以降は、デジタルビデオカメラの映像です。なんでそういうことになったか。2日間撮った段階で、番組を放送する予定だったフジテレビ上層部と、僕が所属していた番組制作会社双方から、撮影中止を言い渡されたんです。理由は、オウムを徹底的な悪として描こうとしていないと。まあ、それに尽きますね。あといくつか言ってきたけど。だからそれ以降は自分でデジタルカメラを用意して、自分で撮り続けました。それがあの映画です。撮影しながら、他のテレビ局にもこの作品は報道できないかと打診したのだけど、基本的には拒絶され続けました。この時期のオウムはメディア全般にとってキラコンテンツだったから、興味を示すプロデューサーも何人かいたけれど、それまでにとって映像の一部を見せただけで、これはダメだと判断されました。

ここで大事なことは、テレビも含めて、なぜメディアはこの作品を拒否したのか、ということです。オウムが悪に見えないからです。言い換えれば、もっと邪悪に凶悪に冷血に撮ってほしいということです。

この時期、テレビはオウム一色でした。特番も毎日のように放送されていました。それらの番組の大前提は、基本的には彼らが邪悪で凶暴で冷血であることです。それをさらに煽る。そのほうが視聴率上がるんです。いかに危険か、いかに邪悪か、いかに凶暴か、つまり不安や恐怖を刺激する。そうすると人はそこにチャンネルを合わせます。これテレビだけじゃないですよ、新聞とか雑誌も同じです。危なくないって言うとみんなチャンネル変えちゃうんです。危ないって言うとみんなチャンネル合わせます。だから、基本的にはメディアは不安や恐怖を煽ります。

これは別に今始まったことではない、戦前、つまり新聞ですね、その頃は、ラジオと新聞でしたけれど、なんであんな戦争が起きたのか。いくつかありますけど、1つはやっぱりメディア、新聞ですね、新聞が戦争を煽ってしまった。アメリカがいかに凶悪か、欧米列強がなぜアジアをこれほどに悪辣に侵略したのかを、我々はそれに対して戦わねばいけない、みたいなそういう論調をどんどん出した。その結果として国民の意識は、戦争を自衛のためにはやむなしという方向に変わってしまう。日

本だけじゃないです、世界中の戦争がそうです。今のロシアについても、プーチンはウクライナにいるロシア系住民の保護と NATO の脅威を、侵攻の理由として説明しています。メディアもほぼすべて同じ論調だから、ロシア国民の多くは侵攻を支持しています。

話を戻しますね。僕の作品をもしもテレビで放送したら大問題になるとテレビ関係者は考えた。否定はしません。物議はかますと思います。視聴者から抗議も来でしょう。被害者の気持ちをお前らはどう考えてるんだとか遺族の気持ちに塩を塗り込むのかとか。まそれは想像がつきます。要するにオウムが悪であることは、国民の願望なんです。だから悪辣に描かねばいけない。でも、映画を観てくれればみんな分かるけれど、彼ら信者の多くは、とても普通です。優しいです。純真です。でも、その彼らが人を殺そうとしたことも確かです。凶暴で凶悪で冷血だから人を殺すんじゃない、普通だから人を殺すんです。善良で純粋だから危険なんです。人間ってそういう存在です。1971年に起きた連合赤軍事件。彼ら過激派のメンバーも同じです。とても真面目な若者たちです。でも同時にそういう人たちが人を殺す。決して邪悪で凶暴だからではない。

ただ、特にメディアはこの辺りの説明を省きます。面倒臭いんですね。で、視聴率にも貢献しない、混乱する、善と悪、正義そうしたものの価値基準が揺らいでしまう。だから、悪いことをした人は邪悪で凶暴、それに対する私たちは無辜の市民、善良、正義にしないと、混乱します。で、混乱してどうするかっていうとチャンネル変えられます。だから、なるべく単純化する。メディアは情報を。それによって、まあ、部数も上がる、視聴率も上がる。結果としては、間違ったとまでは言わないけれど、とても浅い認識でいろんな事件を解釈してしまう。

オウムについて僕は、邪悪で凶暴で冷酷ではない彼らが、なぜ邪悪で凶暴で冷酷な事件を起こしたのかを考えるのが大事だと思います。でも、まあ結果的には、当時の日本社会、メディアも含めて、こうした思考や煩悶を拒絶しました。邪悪で凶暴で冷血だからこんな事件を起こした。とても単純な図式に嵌め込んでしまった。オウムの事件だけじゃない、今だって色んな事件が日々起きてます。こうした文法で語られてしまう事件はとても多い。

あとは被害者や遺族の聖域化、これもやっぱり1995年のサリン事件をきっかけにとっても強くなったことの1つです。遺族が慰撫され、さらに保護されねばならない存在であることは当然です、でも同時に、まるでその

バスターであるかのように、加害者をもっと痛めつけろみたいな意識が高揚します。その帰結として厳罰化が加速する。

すごく雑駁な言い方しちゃうと、オウムのサリン事件以前であれば、例えば、人を2人殺しました。じゃあ君、懲役25年、あるいは20年、まあこれが相場って言葉もちょっとおかしいけど、普通の判例的には基準だったんです。今もうそれは崩れています。もっと重い罰を多くの人が求める。2人殺したなら無期、あるいは死刑。最近では新設されたばかりの侮辱罪とか、刑罰の対象になる犯罪が新たに増えて、同時に罰も重くなっている。

そもそものきっかけ、まあ今回これ僕を呼んでくれたきっかけがね、先ほど松宮先生からも説明があったけれど、カルトについての問題提起みたいな、山本先生もそれをおっしゃっていた。去年まで明治大学で教えていました。毎日一回、キャンパス内でアナウンスが流れます。カルトに気をつけましょう、彼らはうわべは優しい顔をして、あなたに話しかけてきます、……まあ要約すれば、そういう内容です。注意喚起の是非はともかく、文脈的に間違いです。うわべじゃないんです、本当に優しいんです。優しいから危険なんです。うわべは優しい顔をして実は内心舌を出してほくそ笑んでますよ、っていう、そういうニュアンスなんだけど、そうじゃないんです。

カルトという言葉の定義についても考えたい。新興宗教で人を魅惑する力が強く、しかも価値観がその社会からは大きくかけ離れていて、ある意味での危険性を持っている、そういった意味ならば、キリスト教も最初はカルトです。ナザレのイエスは当時のユダヤ人社会の中で危険人物と見なされて処刑された。その意味では、バラモン教が全盛だったインドで違う価値観を訴えたブッダも同様です。日本はそうでもないけれど、宗教はその国や民族のアイデンティティでもある。イエスもブッダも、既存宗教に対するアンチテーゼを唱えました。ムハンマドも同じです。宗教は特に黎明期において、ある意味でカルト的です。社会の価値や基準に合致するのであれば、宗教の意味ないです。そもそも宗教って危険なんです。

なぜ宗教は危険か。それも考えましょう。宗教を持つのは人間だけです。犬や猫は宗教を持たない。チンパンジーもイルカも、賢いけれど宗教は持たない。なぜか。彼らは自分が死ぬことを知らないからです。イルカとかチンパンジーとか賢い生き物であれば、他者が死ぬことは経験則として知っていても、それを自分に演繹できない。自分が死ぬとは思っていない。人間だけが生き物で

唯一、自分が死ぬことを知ってしまった。これって、すごい恐怖ですよ。同時に矛盾です。どれほどに社会的に成功しようが、お金を稼ごうが、富を持とうが、ほぼ80年、90年、100年で死んでしまう。死んだら全部消えてしまう。財産や名声だけではなく自分自身も。これは怖い。だから救いを求める。

宗教は世界中にたくさんありますが、全ての宗教に共通することは、死んだ後を担保してくれるってことです。天国であったり、浄土であったり、生まれ変わりであったり、それは教義によって違いますけど、基本的には死んだ後の魂の存在を宗教は説明する。死んで終わりという宗教はない。

もうちょっと詳しく言うと、ブッダは死後の世界について説いていません。だから、仏教は宗教ではなくて哲学であるという見方をする人もいます。ただ、死んだ後を担保しないと布教できないんです。だから、仏教はブッダが入滅した後に、弟子たちが多くのストーリーを作ります。死んだら浄土に行くとか地獄に行くとか、阿弥陀様とか大日如来とか多くの要素が付加されて今の仏教になっている。キリスト教もイスラム、ヒンドゥーも神道もユダヤ教も、とにかくあらゆる宗教は死後の世界を説く。魂の存在を前提にする。だから危険なんです。死と生の価値がひっくり返るから。

全ての宗教が自殺を禁じています。キリスト教も仏教も、自殺をしたら地獄に行くことになっている。だって宗教は死のハードルを下げるから。もしも今の現実が辛かったら、死んで次の世界に行こうと考える人が続発します。ちょっとリセットしようとなりかねない。だから、自殺を絶対にやってはいけないと宗教は説きます。そして自分の命を軽視するってことは、他者の命も軽視します。ただこれ、軽視じゃないんです。リセットしてあげよう。みんなももしかしたら聞いたことがあるかもしれない。「ポア」というオウムの言葉がありました。実は転生を意味するチベット密教の言葉です。オウムは人を殺す時に「ポア」と説明したけれど、それは決して言い逃れではなく、本気で生まれ変わらせてあげようと思っていたんです。

もちろん、社会の側からすれば、とんでもない迷惑です。彼らがやったことに対して批判して裁く刑罰ことは当たり前です。ただ、犯罪の構成要件は邪悪で凶暴だから、ではない。善意なんです。そこは間違えてはいけない。

宗教はそもそも危険です。でも自分が死ぬことを知ってしまった人類は宗教を手放せない。だから、カルトがどうこうのレベルではなくて、宗教リテラシーが重要で

す。それをしっかり意識として持った上で、まあカルトというか、カルトっていう言葉が何を指しているかよく分からないけれど、基本的にはみんな善意なんです。そこを踏まえたほうがいいんじゃないかと僕は思います。

結果的にはオウムのドキュメンタリーは撮影中止を言い渡されて、僕は危険な作品を作るとしたとの理由で会社から解雇されます。でもちょうどその時期は、デジタルビデオカメラの創成期で、プロじゃなくて一般の人が使えるカメラが初めて市場に出た時期でもあった。だから以降の撮影を続けることができ、それが『A』になりました。海外の映画祭にもよく呼ばれて、上映後に質問されます。なぜあなただけがオウムの施設に入れたのですかと。日本で公開したときも、この質問は多かった。答えは簡単で、撮っていいですかって訊いたから。実は撮影中に、僕も同じ疑問があつて、なぜあつたりと撮影を了解したのか荒木さんに訊いたことがあります。荒木さんは不思議そうな顔をしながら、「撮りたいって言ってきたのは森さんだけです」と答えました。あと、手紙を書いたのも僕だけだよ。

当時、メールなんてない時代ですから、ドキュメンタリー撮る時は、撮りたい対象の人にまずは手紙を書くっていうのは、一般的な作法だったんです。いきなり電話かけて「あなたを撮っていいですか？」なんて言われて「いいです。」なんて答える人まずいから、まずは手紙を書いて、自分はこれこれこういう者で、こういう趣旨であなたを撮りたいんですと説明して、それから直接電話かけるっていうのが、僕たちテレビドキュメンタリストの当たり前の作法だったので、僕はそれやっただけなんです。でも、なぜか僕以外の誰もそれをやらなかった。誰もオウムの信者を撮ろうとしなかった。毎日特番ありますから、間ディアはオウムの周囲に群がっています。でも、普通にカメラを持って撮っていいですか？って訊いたのは僕だけだったんです。

こう答えると、「なぜ他のメディアは撮ろうとしなかったのか？」って言われるから、「それは他のみんなに訊いてください。」と答えています。推測を敢えて話せば、邪悪で凶暴で、冷血なオウムと関係性を持つことが怖かったんじゃないかな、と思います。これを言い換えれば、誰だってその気になれば撮れたんです。「撮っていいですか？」って訊けば、でも誰も、僕以外誰も撮っていいですかって訊かなかった。僕がすごいんじゃないんです。周りが地盤沈下してたから、僕だけが取り残されて浮いてしまった。それが『A』の始まり、ということになります。

『A』という作品は、この近辺だと名古屋のシネマテークで上映しました。ああ、面白いことがあったなあ。シネマテークで上映して、お客さん来ないんですよ。別に名古屋だけじゃない、日本中、大阪でも東京でも札幌でも誰かに言われました。「なんでわざわざお金払ってオウムの映画なんか観なきゃいけないんだ」と。まあもつともだな、と思ったけど、でも、テレビでやっているオウムの番組とは全然違うんですよ、って言ってもやっぱりね、もう嫌悪感、もううんざり、みたいなそういう感じがとても強くて、動員的にはとても苦戦しました。

シネマテークで上映して、終わった後に、まあ僕も呼ばれて行ったんですけど、劇場の支配人とか何人か、僕の友人とか関係者もいて、みんなで打ち上げやろうねって、7、8人いたかな。会場にいた人も何人かも入れて10人くらいで居酒屋に行ってみんなで飲んで。それぞれ自己紹介始めて、でも1人だけ背広の男性がいて、30代前半くらいかな。彼はなんか中々自分の仕事とか、言ってくれないんですよ。名前も。いやいやたいした者じゃないんで、みたいな感じで。まあ無理矢理聞くのも、あれかな、と思って普通に飲んで、喋って笑って、しばらくしてから彼が、「そろそろ帰ります。」って言って立ち上がって、僕のところに来て、「次は公安をもう少し違う角度から撮ってくださいね」って言って、すっといなくなつて。公安って分かります？ 公安警察ですね、だから『A』の中でみなさん観てくれたと思う、不当逮捕をした警察官いましたよね。押し倒して、公務執行妨害だと言ってその信者を逮捕した。だから、まあ彼らですね。公安調査官と公安警察2つあるんだけど、その時は公安警察の人だったみたいで。彼が帰ってく後ろ姿を見ながら、「あの人公安だったのか。」って言ったら、周りのみんなから「お前今頃分かったのか。」って言われました。みんなは感じていたみたい。

長々と何を話しているかという、僕は鈍いんです。特に危機的な状況への感度が低い。火中の栗を拾うってよく言われるのだけど、火中だと分かってないんです、でも手を伸ばすとそれほど熱くない。経験則でそれは知っています。みんなが勝手に火が燃えていると思っ込んでいてという場合が多い。だから栗を拾うことができる。ところが多くの人は、なぜ火中の栗を拾えたのかって不思議がる。

なぜあなただけがオウムを撮れたのかと質問されたとき、そんな感覚になります。誰だって撮れたはずなんです。オウムだけじゃない。いまだにそうした体験は続いています。だから、もう一回言います。森達也がすごいとか、根性があるとか、ジャーナリスティックな何かを

持ってるとか。全然違います。トロいんです。トロいから、撮れるものがある。つまり周りが勝手にみんな萎縮して撮らない、危ない、怖い、あれ撮っちゃダメだって。で、僕は撮っちゃうから、『A』の後にテレビで『放送禁止歌』という作品を発表して、ドキュメンタリーですけど。この作品のテーマのひとつは部落差別です、部落差別にまつわる歌をメインにして、放送してはいけないといわれていた歌を放送したんです。だからあれも、放送後に同業のディレクターなどから「お前よく放送できたね。」と言われるけれど、同じです。部落差別関連は放送してはいけないとか知らなかったから。まあ正確に言えばうすうすは知っていたけれど、何とかかなと思っていました。そして実際に何とかなかった。そのレベルで作品を作ってきました。

日常生活は大変ですよ、失敗ばかり。転んだり、つまずいたり、ぶつかつたりしていますけど。でも逆に言えばその程度で、大きな怪我はせずにここまできて、そういえば今年は劇映画を撮ります。来年公開ですけど、これもテーマとしては、普通の商業映画だったら撮らないものになっちゃうかもしれないけど、まあでも逆に言えばみんなが撮ってるものと同じものを撮ってもしようがないし、そういう感じでやっていこうと思います。

あんまり『A』の話できませんでしたが、死刑の話もしてくれて言われたけどできなかったの、質問してください。質問されたほうが話しやすいです。一旦終わっていいですか。

松：はい、ありがとうございます。ただいまの話の、残された部分ですが、これからですね、対話でも登場して、(第二部の)対談でも登場していただきますけれども、後半中村一成さんに、少し質問を振ってもらうような形で、お話を伺えればと思います。

中村一成 (以下中)

森さんは、「鈍いのが強み」と他の講演でもよく導入部分にします。小賢くて物分かりのいいマスメディア労働者が、その「敏感さ」ゆえに権力に取り込まれていく現実への問いかけですね。それから「強み」の「強」は「強か(したたか)」とも読みます。「鈍い」と言って目の前の人たちをリラックス、あるいは油断させているのかもしれないですね。

さて、『放送禁止歌』という森さんのテレビドキュメントをご覧になった人、います？ いないですか。民間放送連盟にかつてあった要注意歌謡曲指定と言う制度を巡るドキュメンタリーです。この制度は楽曲をABCラ

ンクとかに分けて、オンエア自体NGとか歌詞を変えれば可、あるいはメロディのみならOKとかランク付けする制度なんです。森さんはカメラを担ぎ、その根拠を問うていく。放送番組の作り手の自主規制、マニュアル依存という問題が浮かび上がってくる本当に面白いドキュメンタリーなんです。

森：はい。でも一成さん、まずは自己紹介した方がいいんじゃない？

中：ああ、失礼しました。私は中村一成といいます、さきほどの名前をイルソンと朝鮮語読みしているのは、母親がコリアルーツの人間だからです。1994年の秋から新聞記者をやりまして、2011年に退職して、今はフリーランスでやっています。

物書きとしてのテーマは在日朝鮮人や、移民、難民、移住者を巡る人権、差別問題です。死刑廃止もテーマとして、森さんと最初に会ったのはその運動の場です。私は京都に住んでいるのですが、地元の仲間と一緒に単館の映画館を一週間、帯で借り、死刑を直接、間接的に扱った映画を上映し、そこにアフタートークをつけるという企画をやりました。「死刑映画週間」というのですけど、2012年に第一回、二回目の2014年、『A』を上映し、監督である森さんにゲストで登壇していただきました。その時は先ほど名前が出た荒木浩さんも来てくださり、二人でお話をしていただきました。イベント終了後は荒木さん、ビルの地下にあるパブにまで付き合ってください——これ言っちゃってもいいのかな、でも彼は水しか飲まないんです。それで背筋を伸ばして、私たちのバカ話を聞きながら、ずっとニコニコ微笑んでおられたのを覚えています。

私は1988年に立命館大学に入学して、90年代半ばまでを京都で暮らしました。オウム真理教が過激化していったとされる時期です。リアルな記憶もあります。当時、京都大学が一つの布教拠点だったのです。京都大学の学園祭で、講演に来た麻原さんが側近とキャンパス内を颯爽と歩いている姿や、学生と討論するのを見たこともあります。

森さんの映画を見ても分かるのですが、あの時、オウムに入信した人たちって真面目なんです。生老病死という宿命の苦しみを前に人はどう生きるべきなのかとか、命とは何か、救済とは何かとか、本当は根源的だけど、中学生だって白けるようなことを真剣に考えた。それゆえに入信し、その一部は人を殺め、自らも縊り殺されてしまった。映画の中でも荒木さんが「私は与えら

れた命を全うしたいと思っている」と語るところがあって、あの場面では私はいつも得も言われぬ思いを抱いてしまうのです。

で、自己紹介はこれくらいにして、『放送禁止歌』に戻ります。仕立てが「強か(したたか)」というか巧妙なんです。ラジオやテレビから消された歌を紹介していくのですが、最初は下ネタ系や反社会系なんです。でも次第に風向きが変わる。朝鮮分断を歌い、日本人による訳詞の南側偏向を巡って抗議され、「触らぬ神に祟りなし」的に忌避された「イムジン河」が登場する。その後は「竹田の子守唄」です。歌詞中の「在所」が京都や滋賀では時として被差別部落を意味することから、メディア側の部落タブーで消された歌です。この歌からタブーに切り込み、解放同盟幹部へのインタビューも敢行する。最後は部落差別それ自体を正面から歌ってA級指定された「手紙」まで流れる。これ最初から朝鮮や部落で行けば視聴者を選んでしまうし、そもそもそんな企画をだせば、果たして制作自体出来たのかと思うのです。私、大阪公立大学というところで「メディアと人権」という講座を持っているのですが、メディアとタブーで必ずこのドキュメントを少し、観てもらい、私が解説します。「この人は強かだね」とか言いながら。最初から長々話しましたが、よろしくお願いします。

それで質問です。『A』を撮り終えた後、森さんは逮捕された人たちと面会を重ねられます。『A』の制作が森さんにどういう影響を与えて、彼らとの面会に至り、アクリル板越しに見た彼らっていうのはいかなる人だったのかを教えていただきたいんですけど。

森：『A』を撮って発表した後に、時折批判される、まあ論点はいくつかあるんですけど、森が撮ったのは事件に関わっていない信者ばかりだと。まあ当然ですね、事件に関わった信者はみんな逮捕されていますから。だから、善良に見えるのは当然だと。事件に関わった信者はやっぱり冷酷で凶悪なんだと言う人もたまにいる。だったら会いにいかうと思っていたところに、坂本弁護士一家殺害事件に加担した古参信者の岡座一明さんから会いたいって連絡が来たんです。拘置所では映画は観れないけれど、僕が書いたオウム関連の本を何冊か読んで、会って話したいと思ったらいい。

皆さんは死刑囚に会ったことはないと思うけど、死刑囚は確定する前は会えるんです、確定しちゃったら会えなくなります。確定って意味分かります？ 裁判って一審二審と最高裁でも審査がありますね。一審二審の段階では、基本的にはまだ未確定です。最高裁で棄却される、

つまり、この人はもう死刑囚であると確定したら、一切外部とは、交通って言い方しますが手紙のやり取りや面会もできなくなる。法務省はこの理由を死刑囚の心の安定を保つためと説明します。ふざけんなよ、と僕は思います。面会や手紙をやりとりを禁じられた死刑囚は、孤独と死の恐怖で拘禁障害となって心が壊れます。最近では袴田巖さんがその典型です。心の安定を保ちたいなら逆です。とにかくこの時期は、オウムの死刑囚たちはまだ一人も確定はしていなかったので、多くの幹部たちに会うことができました。

その皮切りが岡崎さんです。拘置所の面会室に通されて、3畳間くらいかな。透明なアクリル板で向う側の空間と仕切られています。岡崎さんは向う側に座りました。隣には刑務官。彼はなんかこう、飄々として「森さん初めまして、岡崎です。」と挨拶して、今は15分とか20分だけど。この頃は30分近く話せたはずです。にこにこ微笑んでいたけれど、坂本弁護士一家殺害事件について僕が質問すると、ちょっとだけ涙ぐんだりとか。彼は幼いころに両親と生き別れていて、母親の愛情にすぐく飢えていて、そういうこと自分からは中々言わないけど、僕がそういう風に水を向けるとやっぱり涙ぐんだりとか、そういう時間を過ごしながら、僕はだんだん落ち着かなくなりました。

なぜ落ち着かなくなったのか。彼はやがて殺される人なんです、殺されなければいけない人なんです。まだ確定はしていないけれど、オウムの犯罪に対しては従来の刑罰の5割増しとか司法関係者もメディアも当たり前のように言っていました。確定はほぼ予想できます。

もちろん、人はみな死にます。事故で、病気で、寿命で。でも、彼は殺されることが決まっている人なんです、公式に。透明なアクリル板越しに話しながら、その意味が分からなくなったんです。今こうして微笑んだり涙ぐんだりしているこの人は、合法的に殺されなければいけない人。そんな存在ってありえるのだろうか。

それまで僕は死刑ということについてあまり深く考えていませんでした。悪いことしたから死刑、人を殺したから死刑、まあ当然だろ、くらいに思ってたんだけど、いざ死刑囚目の前にして、言葉が出なくなっちゃったんですね。その面会が終わった後に、幹部信者で死刑囚の新実智光さん、早川紀代秀さん、広瀬健一さん、林康男さん、中川智正さんと面会して、手紙のやり取りも全員とずっと続けて、そういう感じで、なんであんなことをやったのかってことをまあ、ずっと僕なりに取材してたんですけど、やっぱり彼らもすべて同じです。善良で、礼儀正しくて、優しい人ばかりです。

でもその彼らが2018年に一挙に、正確にいうと2回に分けて、オウムの死刑囚13人は処刑されました。近年の世界では類を見ない大量処刑でした。オウムなんだから殺されて当然だとか、むしろ遅すぎたぐらいだ、みたいな声がネットでも圧倒的に多くて、これが日本社会の今の意識なんだな、と思いました。

中：はい、あの日は遠方の大学で朝一限の授業があって、終わって電車に乗っていたら確か携帯に速報が入ったんです。帰宅してから動画サイトにあったテレビ番組を観たんですけど、今でも冷静には語れない光景でした。死刑囚の顔を並べたパネルがあって、執行がなされるたびに執行って。

森：花みたいなシール。

中：選挙で候補者の下に貼る当選の花と同じですよ。

森：フジテレビです。

中：あの時、シールを貼る手が、妙に手入れされた綺麗な手だったのがすごい印象に残っていて、こんなことをした後、家に帰って、この人例えば家族がいたら、どういう顔して会うんだろうとか、殺人の実況中継をした後、この人はそれまでの自分と同じ自分でいられるんだろうとか、色々考えました。

映像はないけど、殺人の速報やっちゃったんですね。私も新聞記者だったのでその作業の流れが分かるのです。法務省の広報担当をその部屋かどこかで記者たちが囲んでいて、電話か連絡係の役人が来て、今誰それを執行したって連絡が入る。担当者がそれを告げると記者が部屋から飛び出して、廊下や階段で会社に電話をかけて、遊軍記者とかデスクに吹き込むわけです。ベルトコンベアです。本当に悍ましかった。ただ、その時私が一つ思ったのが、世界的にも悪い意味で注目を集めた大量執行、かつ死刑執行っていうものを同時進行でお茶の間に流したことで、次の死刑に関する意識調査——5年に1回調べていますけど、これがどう振れるだろうかかって考えたんですね。情報がリアルに近づいたことで、もしかすれば存置意見が減るのではないかと。

たとえば大島渚さんの『絞死刑』という映画があります。あの作品の根底には、「あんたら知らないのに死刑に賛成って言ってるだろ！」という大島さんの叫びがある。だから最初『絞死刑』のタイトルが浮かんだ後に、あなたは死刑、死刑に賛成ですか、反対ですかってのが

出て、では死刑を見たことがありますかと畳みかけて、空からの目で東京拘置所の執行場を再現したセットの中に観る者を引き込むのですね。大島さんも、知ればそんなことは言えないはずだというある種の「信頼」というか、現状認識があったと思うのですが、森さんはその辺りはどう思いましたか？

森：そうですね。やっぱりまず、死刑囚ってどこにいるかみなさん分かりますか？ 刑務所じゃないんですよ、拘置所にいるんです。拘置所って要するに、裁判中の被告人がいる所です。そこにいます。刑が確定したら刑務所に行くわけだけど、死刑囚は確定した後も拘置所です。なぜか。死刑囚の罰は殺されることです。刑務所に入れちゃうと、殺されることに加えて、自由を拘束することになる。つまり二重刑罰になってしまう。だから、刑務所には入れられないんです。つまり、論理的には死刑囚は確定した段階で家帰っていいんです。普通の生活していいんです。死刑執行の数日前に呼び出しが来るでしょうから、それを受けて刑場に行って執行されればいい。まあでも、普通逃げますよね。僕だったら逃げるな。で、どうするかと。じゃあ刑務所じゃなくて拘置所に入れましょうと。ごまかしです。だって自由を拘束することは一緒なんです。でも、無理矢理にそういうルールを作ってる。

死刑制度の周辺には、こうした矛盾や欺瞞がたくさんあります。死刑執行の瞬間、これは刑場がある拘置所によって違いますけれど、ボタンが3つから5つあるんですね。刑務官がその前に人数分、ボタンの数だけ並びます。いちにのさんでみんなで押します。どれかが繋がってるんです。死刑囚真ん中にいます。ここに床、四角い板の上にあります。首には縄をかけられています。どれかのボタンが繋がって、床板がパンッと抜けます。その瞬間に落下します。そういう仕組みになっている。なぜボタン1つではないのか。自分が殺したという罪の意識を負わせないためです。でもならば、3つのにしても3分の1ですよ、0にはなりません。つまり、刑務官もものすごく傷付きます。実際にボタンを押したことで精神的に変調してしまった刑務官の方、僕は知ってます。誰かが殺さなきゃいけないんです。

あるいは、実際に死刑囚はどのくらい吊るされるか。一応規定があるんですよ、15分。その間は、もしかしたら絶命してないと。15分経ってからドクターが来て、臉を見たり、脈をとったりして、絶命していることを確認する。逆に言えば、だからその間は生きてるかもしれない。ならば苦しんでるはず。後ろで腕を縛られて

ます。両足も縛られてます。目隠しされてます。首を絞められて言葉を発することはできないけれど、もしかしたら15分間地獄の苦しみを味わっているのかもしれない。でも、誰もそれ証明できない。そこから帰ってきた人いないですから。もしも苦しみを与えているならば、これは残虐な刑罰だから憲法違反です。でも多くの司法関係者は目をそむけている。これが死刑の実態です。

死刑に賛成か反対かの前に、まずはこうしたことをみんなが知る。知った上で考える。サッカーについて話しましょうと言われても、誰もサッカーの試合を観ていないしルールも知らないならば、話せるはずがない。どんなスポーツなのか、どんな選手がいるのか、どんなルールなのか。で、実際にサッカー観る。その上でみんなで議論をする。だったら分かりますよ。サッカー知らずにサッカーが好きか嫌い、サッカー賛成か反対かなんで議論しても意味がない、同じです。死刑制度についても、もう少しみんなが知らなければいけない。ところが、メディア死刑の実態や矛盾について、ほぼ報じません。理由は、社会が求めないから。僕らが求めれば、メディアは動きます。でも、多くの人は死刑から目を逸らす。確定するまでは死刑にしろとか大騒ぎするくせに。結果として今も、日本では暗闇で人が殺されていく。その状態は変わりません。

今世界の国でおよそ3分の2は死刑を廃止しています。いわゆる先進国で死刑を残しているのは、アメリカと日本だけです。でもアメリカは州によって違います。アメリカの州のうち、今は半分くらいは廃止しました。バイデンは公約で、連邦は死刑を廃止すると言って、実際に彼はまだ一度も死刑執行していません。多分今後もしないでしょう。つまり、日本は民主国家としては最後の死刑存置国になるかもしれない。こういうこともみんな知らない、メディアが報道しないから。

中：まさに、つつがなく殺すために生かすっていうことがね。当日朝の宣告というの、かつては前日や前々日に告げていたのが変更された。予告したら福岡拘置所で死刑囚が自殺してしまったからです。だから当日の朝に告げて、数時間後にはもう縊り殺されている仕組みにした。自分で自分の命を絶つ最後の自由すら許さない。

森：風邪ひいたら執行延期になるんですよ。体調が良くなってから執行しましょうって。おかしくないですか？ なんか変だろって、なんでそういうことをみんなが言わないかって思うけど。

中：森さんが言ったアメリカのことでいうと、友人がアメリカで死刑の取材をして『ドキュメント 死刑に直面する人々——肉声から見た実態』（岩波書店）という本を書いています。最近、新書になりましたけども（『ルポ法務省がひた隠す究極のリアル』幻冬舎）、同じ存置国でもまるで違うのは情報公開の度合いですね。死刑は納税者の取めた金で行う、究極の権利行使なわけです。国による殺人は大きく言えば戦争と死刑くらいなのに、それをどうして隠すのか、情報公開をしないのかという。

森：アメリカの多くの州は、執行の時にはメディアを入れることがほぼ義務になっています。情報公開と知る権利については、本当に雲泥の差があります。

中：話を映画に戻します。『A』を終えて、『A2』を撮ろうと思ったのは。

森：この会場で『A2』を何人の方が観てるのかちょっと分からないけど、聞きたいけど聞けなげや良かったなって雰囲気になるのは分かっているので聞かないですけど、まあ数人はいるんじゃないかなと。『A』よりも『A2』の方が面白いです、エンタメです。だからもしよかったら観てください。

で、なんだっけ、『A』から『A2』に至る過程でしたっけ。撮る気なかったんですね。『A』は言ってみればフロックです。たまたま僕だけが撮って、誰も撮っていないから稀有な作品になったけれど、それは僕の才能や実力とは無関係です。そんな幸運は二度も続かないと思っていました。だから変な色気を出して恥かくよりは、この1本だけで終わった方がいいと思っていました。

でも『A』を撮り終わった98年以降、明らかに日本社会は、ですね。僕から見るとですが、いろんな意味で劣悪になっていった。オウムに対して開放された憎悪や嫌悪などがどんどん強くなり、危機意識は高揚し、他者に対する寛容さもどんどん失われて厳罰化も加速している。ちょっとこれはまずいんじゃないかな、と想っている時に、『A』の唯一のパートナーでプロデューサーの安岡卓治に、しばらくぶりにオウムの様子を見に行こうよって言われて。まあ、今思えば安岡にうまくのせられたんですね。施設に行ったら、住民との対立が凄まじい状況になってしまっていて、これはもう撮るしかないか、ってことで撮り始めたのが『A2』という作品です。

撮り終わって公開直前にアメリカ同時多発テロが起きて、激しい恐怖と不安にアメリカ中が丸となって悪いイスラムやっつけると集団化を発動して。それを僕たち

は海を挟んで見ながら、やっぱり対岸の火事だからクールに見ることができて、アルカイダであることは確かなのに、なぜアフガニスタンやイラクを攻撃しているのか、とか思うわけです。ならば日本社会も、今のアメリカを見ながら、自分たちもかつてオウムをきっかけに同じように集団化を起こして、今はその延長にいると気づいてくれるかなと思ったのだけど、結論から言えばダメでしたね。結局は『A2』も『A』と同じように動員は厳しかったです。

中：『A』にしても『A2』にしても、海外で注目を浴びて、日本に波及しましたよね。

森：はい。国内よりは海外の評価のほうが高かったような気がします。

中：オウムの施設に入って中を撮り、その続編として中から外をみる。中から見た外の方がある意味ファナティックで狂暴というのがすごく恐ろしかった。

森：視点ですね。つまりリテラシーです。メディアリテラシーで一番重要で基本的なことは、物事は多面的で多重的で多層的であると気づくことだと思っています。どこから見るかで全然変わる。

今ここにカメラがあります。ここから僕を撮ってます。あっちから撮ったらまた違う、まあ当たり前ですよ。違う図になります。あるいはこっちからこっちを撮ってもまた違うものが見える。つまりこの空間だけでも、いろんな視点、視点を変えれば違うものが見えるわけですね。カメラマンがどのサイズやアングルを選ぶのか、編集でどこでどう切り取るのか。編集って取捨選択ですから、このカットはいらぬ、このカットは使うとか。ディレクターは判断します。情報には常に誰かが介入している。中立で客観的な情報なんて存在しません。全て主観的です。誰かの作為なんです。映像だけじゃない。活字もそうです。今日のこの催しを、中村一成と森達也がそれぞれ記事に書いたとして、それは微妙に違います。当たり前ですよ。同じ記事なんて書けるはずがない。それぞれの思想、心情、思い、環境、いろんなものが反映されて記事になります。まあ僕と中村さんは近いかもしれないけれど、この場にももしも産経新聞や週刊新潮の記者がいたら、まったく違う記事になるはずですよ。どちらが正しいのか。どちらも嘘ではないです。視点が違うだけなんです。

ニーチェが『権力の意志』で「事実なるものではなく、

あるのはただ解釈のみ」と書いています。もちろんニーチェは、リテラシーの意味で言ってるわけじゃないのだけど、でもこれはメディア・リテラシーにおいても充分に応用できる至言です。

事実は存在しません。解釈です。AさんBさんCさんがいる、記者でもいいしカメラマンでもいい。彼らが解釈した情報なんです。二次加工されたその情報を、僕らは見たり読んだりしている、それによって動かされたり、怒りを感じたり、共感したり。それは仕方がないことです。僕らは情報に踊らされます。それはもう絶対に防げない。だからこそ、すべての情報は誰かの視点だとの意識を常に持つこと、これがリテラシーの第一歩だと僕は思っています。

中：今回、聞きたいのは「世界一犯罪者に優しい」といわれるノルウェーの犯罪学者で、刑罰そのものの見直しを訴えている故ニルス・クリスティさんのことです。森さんは現地を訪ねて対談したりしてますけど、映像やまとまった時間がないと、ここで話題にするのはちょっと厳しいですかね。

森：厳しいと思う。

中：そうですか。

森：YouTubeで観れるんだけどね。

中：じゃあ別の話題にしましょうか。

森：ていうかさ、僕ばっか喋ってるから一成さんなんか喋れば、あと10分ぐらい。あとで喋るのか。

中：そうですか、結構私が喋りすぎてて、会場の方々から響き買ってるかな、と思いつつ喋ってるんですけど。ではさっき『A2』を撮ったけども、無駄だった的な話をまあされましたけども。

森：無駄とは思わない。

中：無駄っていうか、駄目だった。

森：だから動員は『A』よりはいくかな、と思ったら、ほぼ。

中：ああ、動員の話ですね。

森：うん。

中：なるほど。最後の質問です。森さんはフィクションもドキュメンタリーも作家の創作物だと仰っているし、私もそう思うので間に区分けはしないことが前提です。現実社会の悪化が創作物を凌駕して、ものすごいスピードで進行している中で、森さんは映画や書物など複数の媒体で物凄い量の仕事をされている。森さんはこの社会で、作ったり書いたりする、他者に語り掛けることの意味って、どこに見出してますか。

森：意味。半分くらい自己満足ですよ。あと半分は、3分の1は収入、あと3分の1は名声欲？ まあでも全然名声になってないよな、うーん。

中：一番なさそうなこと言いましたね。

森：そう思います？ 正直に答えているつもりだけど。でも自分の仕事の意味なんて、そんな単純に言葉で言えない。一成さんは何を引き出したくてその質問をしたのでしょうか。

中：こんなに次々と作品を生み出す動機を知りたいと思ったのですけど。

森：動機は。うーん。「見て！見て！」ですね。こんなもの撮りました、こんなもの書きました、それに付きまします。

中：では文章とか、映像作品で、何かできると思いますか？

森：映画とか本とかこんなものに世界変える力はないです。でも、もしかしたら僕の映画を観たり、僕の本を読んでもくれたりした人が、世界を変えてくれるかもしれない。だから、その可能性を信じて。すごいカッコいいこと言ったね。でもまあ本音ですね。そう思ってます。所詮、本とか映画にはそんな力ないです。最後は人が、人が変えるんです世界を。そう思っています。

中：ここでじゃあ閉じた方がいいですかね。

(司会者席から)

山：いや、もう少し時間があるので続けてください。

森：せっかくしめたのにね。

中：せっかくビシッとしまつたのに続けろと。ではもうすぐランクインされる映画のことを話題にします。「福田村事件」です。みなさんご存知でしょうか？ チラシを見た方もおられるかと思いますが、1923年9月に関東大震災が起きます。その翌日に政府が戒厳令を出し、デマが飛び交い、軍警や自警団が朝鮮人を虐殺します。朝鮮人だけではなく、中国人や、大杉栄といった主義者も含め、夥しい人が虐殺されます。

その中に香川県西部から行商にいった被差別部落民がいました。その人たちが千葉県で自警団に虐殺されています。公にはほとんど知られていない事件です。それを森さんは映画にします。森さんらしい、ある種の曲玉だと思うのですが、そもそも「福田村事件」をやろうと思った動機について教えてください。

森：知ったのは20年くらい前です。テレビは半分やってた時期で、新聞、多分読売だったと思うんだけど社会面の本当に片隅に、千葉県野田市で慰霊碑が建立されて、みたいなそういう記事があって、慰霊碑ってなんの慰霊碑だろうと思ったら福田村うんぬんって書いてあって。全然知らなかったんですね。だから調べてみて、こんな事件あったのかと思って。その時はテレビの報道枠の特集とかね、そういう感じではできないかなと思って、各局持ち歩いたんだけど、どこも駄目でしたね。まずは朝鮮人虐殺のハードルが高い。そこに被差別部落問題が重なる、こんなのはテレビじゃできませんって感じで、まあ僕も半分諦めてたんですけど。

『フェイク』という映画、佐村河内守さんを撮った映画発表後に、ちょっともうドキュメンタリーは充分になって気分になって、次は劇映画を撮りたいと思ったんです。だから、福田村事件の映画企画書を作って、1人で映画会社を回りました、日活とか東宝とか。でやっぱり、テレビと同じで、いやちょっとこれは映画にできないですよ、みたいなそういう感じで。諦めてかけていたら、実はたまたま、ややこしいんですけど、福田村事件について書いた僕の本を読んだフォークシンガーの中川五郎さんが、歌にしてくれて。たまたまそれを聴いた荒井晴彦さんというね、映画脚本家ですけど、彼がこれは映画になるんじゃないか、って言って。人を集めて、映画の準備をしていたら、どうもこれソースは森達らしいって話になって。

ちょうどそのとき、劇映画をいったんあきらめて、東京新聞の望月衣塑子記者を被写体にして撮ったドキュメ

ンタリー映画『i―新聞記者ドキュメント―』がキネマ旬報で1位になったんです。ドラマ部門の1位は荒井晴彦さんが撮った『火口のふたり』という作品でした。授賞式の控室が一緒に、荒井さんとはそのときが初対面で、大先輩ですから挨拶しようとしたら、「福田村撮るんだって？」って質問されて、「そうです。」と答えたら、「じゃあ一緒にやろうか、って話になって、現在に至るという。まあそういう感じです。

中：香川県は部落解放同盟が強いエリアです。1997年に同盟が中心となって香川人権研究所という研究機関を起ち上げてまして、私も創設時の理事でした。新聞記者をしながら機関誌の編集をしていたんですけど、研究所で最初に取り組んだテーマの一つが実は「福田村事件の発掘」でした。当時、事件は千葉の地元でもタブーだったんです。聞き取りの依頼で電話したら切られたりとかしました。

そんな中で研究員が調査結果を積み上げたのですが、在日（朝鮮人）からはこんな批判がありました。「朝鮮人と間違えられて殺された日本人もいたことにスポットを当てて何を主張したいのか」と。率直に言って不信感を抱かれたのですね。森さんに質問です。朝鮮人虐殺ではなく、誤認されて殺された日本人の物語を作品にするのは、こういう微妙な部分があると思いますけど、それでもこの史実を撮ろうと思ったのはどうしてなんですか。

森：うーん、言葉を恐れずに言えば、単なる朝鮮人虐殺よりもより、重圧な構成になると思ったし、難しいんです。日本人なのに殺されたっていうレトリックにしちゃうと、じゃあ朝鮮人殺していいのかって話になる訳でね、当たり前ですよ、朝鮮人だって殺していいはずないんだから。そこをどうするかってその映画のストーリーとしてね。その辺りは結構大変でしたけど、なんとかクリアできたかなと思ってます。

要するに、ちょっともしかしたらこの2人何喋ってんの、っていう人もいるかもしれないけど。関東大震災の後に朝鮮人虐殺、被害者は5000人6000人8000人とか、いろんな説があります。でもとにかく大量虐殺であることはまちがいない。なぜ殺したのかというと、当時日本は朝鮮を植民地にしていました。併合は1910年だからそれから10年くらいか、関東大震災が起きたのは1923年。この少し前に、朝鮮では日本に対する抵抗運動である三・一運動が起きています。一部は暴徒化したし、日本の治安権力も暴力的にこれを鎮圧した。こうした報道

を新聞で読みながら、日本の多くの人は、きっとあいつら隙を見て俺たちに仕返しにくるぞ、と思っていたはず。この時期は多くの朝鮮人が日本に徴用されていました。だって日本は彼らから土地を奪ったのだから、祖国では働こうにも働けない。この震災で乗じて何かしてくるんじゃないかと、そうしたような恐怖感・不安感を多くの日本人が持ち、当時の唯一のメディアである新聞も、内務省や警察が流したデマをそのまま記事にした。朝鮮人が井戸に毒を入れようとしているとか、朝鮮人が略奪・放火してるとか。これを信じた日本人たちが徒党を組んで自警団を作り、多くの朝鮮人を虐殺した。これは史実です。

でも、今これを否定する人がとても多くなってきている。これだけじゃないですね、南京虐殺、従軍慰安婦、こんなものは存在してないと。日本は南京で虐殺なんかしてませんと。こうした声がとても多くなっている。これまでは、毎年9月1日震災の日に、東京都知事が朝鮮人に対して慰霊の言葉を出していたのだけど、現在の小池百合子都知事は出していません。石原慎太郎ですら出していたのに、彼女は出していない。明らかに世相が反映されています。

歴史は失敗を学ぶためにあると思うんです。何を間違えたのか、何を誤ったのか。だってそれを学ばなかったらまた同じ失敗するわけじゃないですか。年号を覚えるとか、応仁の乱は誰と誰だったとか、もちろんそんな知識もあっていいけれど、大事なことは自分達の失敗です。つまり近現代史。でも日本の教育では、近現代史の割合がとても小さい。

自分達にとって都合の悪い歴史を学ばなきゃいけない。失敗を学ばなきゃいけない。思い出したくないことを思い出さなきゃいけない。前に進むためです。人間だってそうでしょ、過去に自分が失敗したこと、悔しかったこと、自分が人を嘲笑ってしまったこと、思い出したくないですよ。なかったことにしたいです。でも、

そうした記憶を忘れちゃって成功体験ばかりを覚えている人がいたら、友達になりたくないですよ。今の日本がそうなんです。自分達はこんなに素晴らしい、こんなに気高い、崇高な日本が南京で虐殺なんてするはずがない。崇高な日本人、日本兵たちは慰安婦なんか利用するはずがない。こうしたことを本気で言う人がたくさん出てきた。これ嫌な奴ですよ。こんな奴とは僕付き合いたくない。

日本だけじゃない。世界中で国家は大きな失敗をしています、ロシアはかつてスターリン時代に100万に近い人が粛清された。ナチスドイツはホロコーストで600万人を殺害した。中国の文革では1000万人以上の人が命を落としている。ぜんぶ国家の失敗です。負の歴史がある。韓国だって光州事件や四・三事件で数万単位の自国民を軍隊が殺している。記憶しなければいけない。この福田村事件、大手の企業、映画会社合めてみんな手を貸してくれません。こんな映画作っただって誰も観にこないでしょってそういう感じでね、冷淡。まあ当然抗議もくるでしょうね、反日映画だって。上等です。反日で構わない。自分達のこの過ちの歴史をしっかりと認識しなければいけない。アメリカはどうしようもない国です。力任せで独善的。でも自分たちの負の歴史を嘔みしめている。先住民虐殺や黒人差別、最近ではブッシュ政権のイラク侵攻など、ハリウッドは何本も映画を撮っています。

日本では、自分たちの負の歴史の映画がほとんどない。映画業界に生きる一人としては、悔しいし情けない。だから絶対にこの映画を完成させます。

松：それではありがとうございました、丁度時間になりましたので前半を一度ここでしめさせていただきます。思います。

(2)に続く。